

地域貢献の側面からみた「未来からの留学生」の意義 —学生と参加児童との有効な関係の構築—

高木 由美子・小方 朋子・岡田 知也・野崎 武司・日野 陽子・宮崎 英一・
米村 耕平・大久保 智生

(理科教育講座) (特別支援教育講座) (音楽教育講座) (保健体育教育講座) (美術教育講座) (技術教育講座)
(保健体育教育講座) (学校教育講座)

760-8522 高松市幸町 1-1 香川大学教育学部

A Significance of “Mirai karano Ryugakusei” for Regional Contribution : How to achieve Heart-to-heart Relationship between Staffs and Primary School Children

Yumiko Takagi, Tomoko Ogata, Tomoya Okada, Takeshi Nozaki, Yoko Hino,
Eiichi Miyazaki, Kohei Yonemura and Tomoo Okubo

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

要 旨 香川大学教育学部が主催している「未来からの留学生」において、地域貢献という側面から「未来からの留学生」がどのような役割を果たすことができているのかという点についてアンケート調査を実施した。その結果、活動内容に興味を持って参加した地域住民ほど満足感が高く、子どもの満足感も高いと思っており、大学への関心を向上させ、学生スタッフと教員の対応が良いと考えていることが明らかとなった。

キーワード 地域貢献 実地教育 学生と児童の関係 意識調査

1. はじめに

平成14(2002)年度から現行の学習指導要領が完全実施され、学校は週5日制となっている。その目的は学校、家庭、地域社会の役割を明確にし、それぞれが協力して豊かな社会体験や自然体験等の様々な活動の機会を子どもたちに提供することによって、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動する資質や能力、自らを律しつつ他人を思いやる豊かな心やたくましい人間性などの「生きる力」を育むことにある。「未来からの留学生 教育学部フェスティ

バル in 香大」(以下「未来からの留学生」)は休日にキャンパスを開放し、「未来からの留学生」として講座に参加する幼児・児童・生徒に、大学という「学び」の場において学習や研究活動を体験してもらう行事である¹⁾。

「未来からの留学生」は、教員有志により組織された実施専門委員会が企画立案し、それに基つき学務委員会を通じて各コース・領域から選出された実施委員の協力を得て、ボランティア学生とともに企画運営・実施するという体制をとってきた。(論文末尾に注記) 第2回が9月23日に開催されたのを除き、例年10月上旬に

開催しており、平成21（2009）は10月12日（日）に第7回を開催した。平成21（2009）年度からは、講座担当学生、1年生ボランティア学生、コラボレーション講座学生からなる学生ボランティア組織と協力して企画運営を行った。

2. 「未来からの留学生」を開催する意義

初めての開催であった平成14（2002）年度は、本学附属学校園の園児・児童・生徒を対象に実施した。その成果を受けて、平成15（2003）年度より、ひろく一般にも対象を広げて参加者募集をはじめた。本行事を企画・実施する目的について以下3点にまとめる。

第一は地域貢献である。地域に貢献し、地域と共に発展する大学及び学部としては、子どもたちのために、知的に楽しみ、学習する機会を提供していくことが使命であるといえる。教育学部には多様な専門領域の教員がおり、様々な分野での学びの機会を提供することが可能であろう。

第二は教育学部生・大学院生に、子どもたちとの接点を様々な形で持ってほしいという願いからである。学部4年間のカリキュラムを通して、「附属学校・園における教育実習」は学部学生共通の重要な体験活動である。そして、子どもたちと「学び」、「気づき」、「体験」等を通して関わるという点においては「未来からの留学生」にも共通した学びの価値があると思われる。「未来からの留学生」に関わった経験が学部生・大学院生にとって将来、豊かな人格形成と将来の地域社会を支える人材育成のためのかけがえのない財産となるであろうと考えている。

第三は教員のFD（ファカルティ・デベロッ

プメント）に関連して、教育学部の教員が子どもの学びを支援するという視点を共有するためである。教員が専門の研究を活かして、教材開発や教育方法改善へと繋げるためには、子どもたちとの交流が不可欠であろう。子どもたちをキャンパスに招き、講座を担当する。そのことが子どもの学びへの関心を高め、ひいては教育学部の教員としての力量を形成することになると考えている。

3. 「未来からの留学生」の実施および効果の検証

「未来からの留学生」は、モノを作ったり、身体を動かしたり、講義や実験を体験したりする定員制の事前申込型講座と、展示等事前の申込が必要でない自由参加型講座の2タイプを開講している。更にオープンキャンパス、特別講演、特別企画などを併設している。

講座は、全てのコース・領域が、最低1つの講座あるいは企画参加を計画している。以下にその開講数の年度ごとの推移を示した（Table 1）。

高校生のためのオープンキャンパスは、平成15（2003）年度より年に2度以上実施することになった。高校生に教育学部の魅力と活動の一端をアピールするためには「未来からの留学生」は、絶好の機会であることから、オープンキャンパスを同日に実施することになった。オープンキャンパスは、8月にも実施しており、カリキュラムの説明などを行っている。もう一つの大学生の活動を知ることのできるオープンキャンパスとして、香川大学教育学部で主催している行事に高校生が参加し、子どもたちの歓声が

Table 1 開講講座数の推移

講座 \ 年	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009
事前申込型講座	15	26	23	22	25	15	23	19 ^{a)}
自由参加型講座	3	10	21	18	16	23	13	15
計	18	36	44	40	41	38	36	34

a) 平成21（2009）年度は特別講演を事前申込の形で募集したためその数を含む

あふれている様子に接し、教育実践の現場を体験することにより、一人でも多くの高校生が「香川大学教育学部で教員を目指し学んでみたい」と思ってもらえれば幸いである。

特別講演は、平成17（2005）年度から附属教育実践総合センターと共催で実施している。平成21（2009）年度は東北大学加齢医学研究所遺伝子導入研究分野・高井俊行教授による「アレルギーのしくみ・免疫のふしぎ」と、気象業務支援センター振興部・村山貢司専任主任技師による「気象のふしぎ」であった。平成21（2009）年度の昼休みのコンサートは附属高松中学校吹奏楽部に依頼した。平成20（2008）年4月に開館した香川大学博物館とのコラボレーション講座を「夢化学21-in kagawa」というタイトルで開催した。行事の実施効果の検証は、平成14（2002）年開催当初より参加者のアンケートを元に検討を重ねてきた。平成20（2008）年度は事前申込型講座・自由参加型講座に参加した児童、保護者を対象にアンケートを実施した（回収数519）。その結果によれば、講座に参加して、満足しているという回答は9割を超えていることがわかった。また、「毎年楽しみにしています」といったリピーターも年ごとに増加していることがわかっている²⁾。

平成19（2007）年度は、学部生・大学院生の実地教育という側面において、「未来からの留学生」がどのような役割を果たすことができているのかという点について、学部生・大学院生がどのような意識をもって関わっているのかという視点から調査を実施し、分析・考察を行った^{2, 3)}。その結果、自律性の高い動機づけに基づいて「未来からの留学生」に参加している学生ほど満足し、次回の企画への参加の意欲も高く、子どもとうまく接する自信を持ち、自身の成長を実感しており、子どもや教育への関心も高まっていることが明らかとなった³⁾。

現代の教育現場では、教育環境を取り巻く社会の変化や諸課題に対応できる高度な専門性と豊かな人間性、社会性を備えた、力量ある教員の育成をすることが不可欠であり、教育学部教員はそれを担うことが求められている。本行事

はその目的のひとつにファカルティ・デベロップメント及びスタッフデベロップメント（教職員の職能開発、FD・SD）を掲げている。本行事は、教育学部の教員が子どもの学びを支援するという視点を共有し、教員が専門の研究を活かして、教材開発や教育方法改善へと繋げるために、子どもたちとの交流を通じて子どもの学びへの関心を高める機会になると考えている。そして活動に積極的に参加することにより、教育学部の教員としての力量が形成される一助になると位置づけており、FD・SDや、教職員の力量形成に対する関心は高まっている⁴⁾。平成20（2008）年度は教員のFDに関するアンケート調査を行った。その結果、参加した教職員は子どもたちとふれ合う機会を十分持つことが出来、目的に賛同して未来からの留学生に参加・協力している教員ほど高い満足度を示す傾向が見られ、他の教員や学生との関係も向上していることが明らかとなった⁵⁾。

未来からの留学生の目的は、先にも述べたように、地域貢献、学生への学びの機会提供、教職員へのFD・SDを掲げている。平成21（2009）年度は、アンケートを実施し、地域貢献の側面からみた「未来からの留学生」の意義を明らかにし、学生と児童を通しての地域との有効な関係の構築方法について調べてゆくことで未来からの留学生という行事が地域住民に対してどのような影響を及ぼしているか過去のアンケートを参考に調査し、今後の実施に生かすことを計画した。

4. アンケート調査の方法及び結果と考察

（1）方法

1）調査対象者

地域住民350名が調査に参加した。年齢の内訳は、中学生が6名、高校生が3名、20歳代が3名、30歳代が173名、40歳代が146名、50歳代が14名、60歳以上が5名であった。居住地域の内訳は、「高松市」が212名、「高松市以外の香川県内」が103名、「香川県外」が17名、不明が18名であった。何を見て未来からの留学生に参

加したのか（宣伝の形態）の内訳は、「チラシ・ポスターを見て」が283名、「子どもから聞いて」が31名、「他の保護者から聞いて」が14名、その他が22名であった。

2) 調査内容

①参加の動機

未来からの留学生に参加したことのある地域住民にインタビューを行い、参加の動機尺度17項目を作成した。「未来からの留学生に参加していただいた理由についてお尋ねします」と最初に提示し、未来からの留学生の動機について「あてはまらない」（1点）から「あてはまる」（5点）までの5件法で回答してもらった。

②満足感

「未来からの留学生に参加して満足しましたか」という教示の下、参加による満足感について「満足していない」（1点）から「満足している」（5点）までの5件法で回答してもらった。

③参加児童の満足感

「お子さんは未来からの留学生に参加して満足していると思いますか」という教示の下、参加児童の満足感について「満足していないと思う」（1点）から「満足していると思う」（5点）までの5件法で回答してもらった。

④次年度への参加意欲

「未来からの留学生に来年も参加したいですか」という教示の下、次年度への参加意欲について「参加したくない」（1点）から「参加したい」（5点）までの5件法で回答してもらった。

⑤大学への関心の向上

「未来からの留学生に参加して大学への関心が高まりましたか」という教示の下、大学への関心の向上について「高まらなかった」（1点）から「高まった」（5点）までの5件法で回答してもらった。

⑥学生スタッフの対応

「未来からの留学生の学生スタッフの対応はいかがでしたか」という教示の下、学生スタッフの対応について「悪かった」（1点）から「良かった」（5点）までの5件法で回答してもらった。

⑦教員の対応

「未来からの留学生に参加して教員の対応はいかがでしたか」という教示の下、教員の対応について「悪かった」（1点）から「良かった」（5点）までの5件法で回答してもらった。

（2）結果と考察

1) 地域住民の参加の動機について

地域住民の参加の動機尺度17項目に対して、因子分析（最尤法，Promax回転）を行った。その結果、3因子14項目が妥当であると考えられた（Table 2）。第1因子は、「大学のことがわかるから」「自分も勉強したいから」など、高等教育の場としての大学への興味や関心を表す項目からなっているので、「高等教育の場への興味」と解釈した。第2因子は、「いろいろな体験をさせたいから」「面白そうな講座があったから」など、未来からの留学生における活動内容への興味や関心を表す項目からなっているので、「活動内容への興味」と解釈した。第3因子は、「大学に近いから」「交通の便がよいから」など、未来からの留学生に限らないイベント自体への興味を表す項目からなっているので、「イベントへの興味」と解釈した。

尺度の信頼性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出したところ、第1因子が0.789、第2因子が0.738、第3因子が0.723であった。したがって、内的整合性の観点からの信頼性はあまり高くないものの一応確認された。そして、各因子に含まれる項目の得点の合計を項目数で割り、それぞれ「高等教育の場への興味」得点、「活動内容への興味」得点、「イベントへの興味」得点とした。

地域住民の未来からの留学生参加の動機について検討するため、参加の動機尺度の平均と標準偏差を算出した（Table 3）。その結果、未来からの留学生に参加した地域住民は「高等教育の場への興味」得点が3点台であり、「活動内容への興味」得点の平均が4点台であったが、「イベントへの興味」得点の平均が2点台と低かった。したがって、地域住民は、高等教育の場としての大学に興味をもち、未来からの留学生の活動内容に興味を持って未来からの留学生に参加していることが示唆された。また、未来

Table 2 参加への動機尺度の因子分析結果

〈項目〉	因子 I	負荷 II	量 III
I 高等教育の場への興味 ($\alpha=.789$)			
大学のことがわかるから	.912	-.021	-.060
自分も勉強したいから	.667	.083	-.023
子どもに大学を見せたかったから	.608	.127	-.008
子どもが勉強を好きになってくれるかもしれないから	.522	.073	.059
II 活動内容への興味 ($\alpha=.738$)			
いろいろな体験をさせたいから	-.010	.653	-.123
面白そうな講座があったから	.139	.636	-.054
安全に活動できるから	-.056	.588	.221
学校では学べないことが学べるから	.023	.573	-.011
大学生が丁寧に子どもと接してくれるから	.185	.546	.084
III イベントへの興味 ($\alpha=.723$)			
大学に近いから	-.153	.075	.776
交通の便がよいから	-.106	.173	.710
学校の先生がすすめてくれたから	.272	-.269	.436
参加してよかったという話を聞いたから	.216	-.024	.427
知ってる先生や友人に会えるかもしれないから	.252	-.158	.409
因子間相関			
	I	II	
II	.224		
III	.450	.023	

Table 3 参加への動機尺度の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
高等教育の場への興味	3.616	1.027
活動内容への興味	4.488	0.578
イベントへの興味	2.539	1.008

からの留学生に限らないイベント自体への興味で参加しているわけではないことから、地域住民にとって、未来からの留学生というイベントが参加の動機になっているといえる。

2) 未来からの留学生参加による効果について

未来からの留学生参加による効果について検討するため、今回用いた尺度の度数分布と平均および標準偏差を算出した。その結果、未来からの留学生への「満足感」では、「満足している」と「どちらかというと満足している」と答えている地域住民が約80%を占め、平均も4.32と高い値となった (Table 4)。未来からの留学生への「児童の満足感」では、「満足している

と思う」と「どちらかというと満足していると思う」と答えている地域住民が約90%を占め、平均も4.49と高い値となった (Table 5)。「次年度へ参加意欲」では、「参加したい」と「どちらかというと満足していると思う」と答えている地域住民が約90%を占め、平均も4.72と高い値となった (Table 6)。「大学への関心の向上」では、「高まった」と「どちらかというと高まった」と答えている地域住民が約70%を占め、平均も4.10と高い値となった (Table 7)。「学生スタッフの対応」では、「良かった」と「どちらかというと良かった」と答えている地域住民が約90%を占め、平均も4.85と高い値となった (Table 8)。「教員の対応」では、「良かった」と「どちらかというと良かった」と答えている地域住民が約90%を占め、平均も4.61と高い値となった (Table 9)。

以上の結果から、未来からの留学生に参加した地域住民は企画に満足しており、参加児童も

Table 4 満足感の度数分布と平均値および標準偏差

	満足して いない	どちらかという と満足していない	どちらとも いえない	どちらかという と満足している	満足 している	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に参加して満足しましたか	22	18	9	63	217	4.32
	6.7	5.5	2.7	19.1	66.0	(1.187)

下段はパーセント

Table 5 子どもの満足感の度数分布と平均値および標準偏差

	満足して いない	どちらかという と満足していない	どちらとも いえない	どちらかという と満足している	満足 している	平均値 (標準偏差)
お子さんは未来からの留学生に参加して満足している と思いますか	20	10	2	51	238	4.49
	6.2	3.1	.6	15.9	74.1	(1.096)

下段はパーセント

Table 6 次年度への参加意欲の度数分布と平均値および標準偏差

	したく ない	どちらかという としたくない	どちらとも いえない	どちらかという としたい	したい	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に来年も参加したいですか	6	1	6	55	264	4.72
	1.8	.3	1.8	16.6	79.5	(.690)

下段はパーセント

Table 7 大学への関心の向上の度数分布と平均値および標準偏差

	高まら なかった	どちらかという と高まらなかった	どちらとも いえない	どちらかという と高まった	高まった	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に参加して大学への関心が 高まりましたか	11	8	63	105	145	4.10
	3.3	2.4	19.0	31.6	43.7	(1.007)

下段はパーセント

Table 8 学生スタッフの対応の度数分布と平均値および標準偏差

	悪かった	どちらかという と悪かった	どちらとも いえない	どちらかという と良かった	良かった	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生の学生スタッフの対応は いかがでしたか	0	0	2	45	285	4.85
	0	0	.6	12.6	79.6	(.372)

下段はパーセント

Table 9 教員の対応の度数分布と平均値および標準偏差

	悪かった	どちらかという と悪かった	どちらとも いえない	どちらかという と良かった	良かった	平均値 (標準偏差)
未来からの留学生に参加して教員の対応は いかがでしたか	0	1	40	45	240	4.61
	0	.3	12.3	13.8	73.6	(.710)

下段はパーセント

Table 10 年代による各尺度の平均値と分散分析の結果

	30歳代 (N=173)	40歳代 (N=146)	50歳代以上 (N=19)	F値
満足感	4.39 (1.124)	4.22 (1.266)	4.33 (1.283)	.667
子どもの満足感	4.58 (.961)	4.46 (1.128)	3.81 (1.721)	3.777* (30代>50代以上)
次年度への参加意欲	4.79 (.527)	4.63 (.873)	4.72 (.575)	2.046
大学への関心向上	4.11 (.997)	4.13 (.937)	3.78 (1.629)	.985
学生スタッフの対応	4.86 (.344)	4.83 (.415)	4.94 (.236)	.885.
教員の対応	4.61 (.710)	4.58 (.731)	4.82 (.529)	.861
高等教育の場への興味	3.62 (1.062)	3.68 (.890)	3.23 (1.482)	1.226
活動内容への興味	4.52 (.458)	4.49 (.623)	4.46 (.943)	.133
イベントへの興味	2.43 (1.03)	2.68 (.965)	2.43 (.852)	2.232
() 内は標準偏差				*p<.05

満足していると思っていることが明らかとなった。また、参加した地域住民は来年もまた参加したいと思っており、大学への関心も高まり、学生スタッフと教員の対応も良かったと思っていることが明らかとなった。参加者の中には、毎年希望講座に申し込みをしているが先着順に漏れてしまい参加できないという苦情が出るほど内容的には盛況である。これらの結果より、未来からの留学生は地域貢献の企画として目的の範囲内で意義あるものであることが示されたといえる。

3) 年齢および居住地域、宣伝の形態が及ぼす影響について

年齢による地域住民の意識の差について検討するため、年齢(30代、40代、50代以上)を独立変数とし、今回用いた尺度を従属変数とした1要因の分散分析を行った(Table 10)。その結果、「子どもの満足感」($F(2, 308) = 3.777, p < .05$)において有意差が認められたのでTukey法による多重比較を行った。この結果から、30代の地域住民のほうが50代以上の地域住

民よりも子どもの満足感が高いと思っていることが示された。年代別では30代の地域住民の参加が多いが、こうした若い地域住民にとって未来からの留学生は参加児童が満足できる企画となっているといえる。

居住地域による地域住民の意識の差について検討するため、居住地域(高松市内、香川県内、香川県外)を独立変数とし、今回用いた尺度を従属変数とした1要因の分散分析を行った(Table 11)。その結果、「次年度への参加意欲」($F(2, 328) = 3.695, p < .05$)と「イベントへの興味」($F(2, 308) = 10.567, p < .001$)において有意差が認められたのでTukey法による多重比較を行った。この結果から、高松市内の地域住民のほうが香川県外の地域住民よりも次年度への参加意欲が高いことが示された。また、高松市内と香川県内の地域住民のほうが香川県外の地域住民よりもイベントへの興味が高いことが示された。居住地域別では高松市内が多いが、高松市内の地域住民にとって、大学が近くにあることから未来からの留学生は次年度も参加

Table 11 居住地域による各尺度の平均値と分散分析の結果

	高松市内 (N=212)	香川県内 (N=103)	香川県外 (N=17)	F値
満足感	4.28 (1.242)	4.46 (.965)	4.00 (1.620)	1.390
子どもの満足感	4.49 (1.086)	4.51 (1.073)	4.31 (1.494)	.185
次年度への参加意欲	4.76 (.670)	4.70 (.559)	4.29 (1.312)	3.695* (市内>県外)
大学への関心向上	4.16 (.935)	4.00 (1.024)	3.88 (1.616)	1.280
学生スタッフの対応	4.85 (.372)	4.86 (.373)	4.82 (.393)	.098
教員の対応	4.65 (.679)	4.55 (.744)	4.41 (.870)	1.330
高等教育の場への興味	3.66 (.946)	3.54 (1.111)	3.45 (1.437)	.607
活動内容への興味	4.47 (.581)	4.50 (.564)	4.69 (.655)	.929
イベントへの興味	2.70 (.975)	2.16 (.954)	2.90 (1.202)	10.567*** (市内,県外>県内)
() 内は標準偏差				*p<.05 ***p<.001

したい企画であり、イベント自体への興味で参加しやすい企画であるといえる。

宣伝の形態による地域住民の意識の差について検討するため、宣伝の形態（チラシ・ポスター、子どもに聞いて、保護者に聞いて）を独立変数とし、今回用いた尺度を従属変数とした1要因の分散分析を行った（Table 12）。その結果、全ての尺度において有意差が認められなかった。したがって、宣伝の形態による地域住民の未来からの留学生に対する意識には特に違いがみられないことが示された。県外への積極的な広報は行っていないことから、県外から来る参加者はオープンキャンパスに参加した生徒やその保護者である可能性も高い。今回の調査では有意差が認められなかったが、参加者の9割弱がチラシ・ポスターを見て参加したと回答しており、チラシ・ポスターを見てきた地域住民が非常に多いことから宣伝の効果は十分あったと考えられる。

4) 参加の動機が及ぼす影響について

どのような動機に基づいて参加すると効果が

あるのかを検討するため、参加の動機を説明変数とし、「満足感」、「子どもの満足感」、「次年度への参加意欲」、「大学への関心の向上」、「学生スタッフの対応」、「教員との対応」を目的変数とした重回帰分析を行った（Table 13）。

その結果、「満足感」については、「活動内容への興味」（ $\beta = .253$, $p < .001$ ）が影響していた。「子どもの満足感」については、「活動内容への興味」（ $\beta = .170$, $p < .01$ ）が影響していた。「次年度への参加意欲」については、重相関係数が有意ではなかった。「大学への関心の向上」については、「高等教育の場への興味」（ $\beta = .432$, $p < .001$ ）と「活動内容への興味」（ $\beta = .187$, $p < .001$ ）が影響していた。「学生スタッフの対応」については、「活動内容への興味」（ $\beta = .252$, $p < .001$ ）と「イベントへの興味」（ $\beta = .184$, $p < .01$ ）が影響していた。「教員の対応」については、「高等教育の場への興味」（ $\beta = .156$, $p < .05$ ）と「活動内容への興味」（ $\beta = .174$, $p < .01$ ）が影響していた。

以上の結果から、高等教育の場としての大学

Table 12 宣伝の形態による各尺度の平均値と分散分析の結果

	チラシ・ポスターを見て (N=283)	子どもに聞いて (N=31)	他の保護者に聞いて (N=14)	F値
満足感	4.34 (1.182)	4.40 (1.070)	3.69 (1.494)	1.941
子どもの満足感	4.48 (1.108)	4.60 (1.037)	4.00 (1.477)	1.278
次年度への参加意欲	4.71 (.728)	4.80 (.484)	4.46 (.660)	1.046
大学への関心向上	4.10 (.998)	4.07 (1.143)	3.69 (.947)	1.025
学生スタッフの対応	4.85 (.377)	4.90 (.305)	4.85 (.376)	.234
教員の対応	4.61 (.704)	4.59 (.733)	4.69 (.630)	.108
高等教育の場への興味	3.62 (1.012)	3.57 (.984)	3.12 (.993)	1.580
活動内容への興味	4.51 (.525)	4.58 (.429)	4.17 (1.004)	2.871
イベントへの興味	2.49 (.985)	2.61 (1.042)	2.54 (1.141)	.210

() 内は標準偏差

Table 13 重回帰分析の結果

	満足感	子どもの 満足感	次年度への 参加意欲	大学への 関心の向上	学生スタッフ の対応	教員の 対応
高等教育の場への興味	.002	.064	.147	.432***	-.143	.156*
活動内容への興味	.253***	.170**	.066	.187***	.252***	.174**
イベントへの興味	-.135	-.072	-.067	.108	.184**	.081
重相関係数	.273***	.194*	.165	.570***	.291***	.297***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

に興味を持って参加した地域住民ほど大学への関心を向上させ、教員の対応が良いと考えていることが明らかとなった。活動内容に興味を持って参加した地域住民ほど満足感が高く、参加児童の満足感も高いと思っており、大学への関心を向上させ、学生スタッフと教員の対応が良いと考えていることが明らかとなった。未来からの留学生に限らないイベント自体への興味で参加している地域住民ほど、学生スタッフの対応が良いと考えていることが明らかとなった。したがって、活動内容に興味を持って参加する地域住民ほど様々な効果があると考えられる。

5. おわりに

香川大学は、「世界水準の教育研究活動により、創造的で人間性豊かな専門職業人・研究者を養成し、地域社会をリードするとともに共生社会の実現に貢献する。」ことを大学の理念に、教育、研究とともに地域貢献の目標を掲げ学究活動を行っている。地域貢献では「知」の源泉として、地域のニーズに応えるとともに、蓄積された研究成果をもとに文化、産業、医療、生涯学習等の振興に寄与することや、学術・文化・生涯学習の拠点としての活動、産学官の一層の連携、積極的な情報発信を行うことをめざしている。環境調査、大学紹介等にも幾度も取り上

げられた「未来からの留学生」であるが、今回アンケート調査を実施することにより、1) 参加した地域住民にとって、未来からの留学生というイベントが参加の動機になり、未来からの留学生というイベント自体が地域に定着したこと、2) 参加した地域住民は企画に満足しており、参加児童も満足していると思っていること3) 参加した地域住民は大学への関心が高まり、4) 地域住民は学生スタッフと教員の対応に好感を持ったということが明らかになった。

また、未来からの留学生に限らないイベント自体への興味で参加している地域住民は、学生スタッフの活動に興味を持ってもらうことができたこと、来年度再度参加したいという希望が増え、企画に興味を持って参加した地域住民は満足感が高く本事業が意義あるものであることを客観的に示す結果となった。今までの調査と合わせて、地域住民の方々の目からも学生と参加児童との有効な関係が構築されていることが明らかになったといえよう。チラシ・ポスターを見てきた地域住民が非常に多いものの宣伝の形態による結果には有意差が認められなかったことから、次年度は新たな宣伝方法を募集の前の段階で実施することを計画したいと考えている。本事業のますますの発展のためにこの調査結果を生かしていきたいと考えている。

引用文献

- 1) 山神真一・野崎武司・岡田知也・小方朋子「教育学部FDと学生の実地指導を企図した学部一附属連携事業の試み―“未来からの留学生”一日体験入学を通して―」『香川大学教育実践総合研究』2003, 6, 25.
- 2) 高木由美子他『未来からの留学生報告書』2008
- 3) 岡田知也, 野崎武司, 高木由美子, 日野陽子, 山田貴志, 米村耕平, 大久保智生, 久保直人, 山本木ノ実, 「実地教育の側面からみた「未来からの留学生」の意義―参加の動機づけに関する学生の意識調査から―」『香川大学教育実践総合研究』2008, 16, 133.
- 4) 文部科学省 2008年度報道資料 (2008.06.06)
- 5) 高木由美子, 岡田知也, 野崎武司, 日野陽子, 小方朋子, 米村耕平, 大久保智生, 山本木ノ実, 「FDの側面からみた「未来からの留学生」の意義―参加した教員の意識調査から―」『香川大学教育実践総合研究』2009, 19, 21.

(注記) 第8回「未来からの留学生」の実施組織は以下の通りである。

〈実施専門委員会〉

高木由美子 (委員長), 小方朋子 (副委員長), 岡田知也, 野崎武司, 日野陽子, 宮崎英一, 米村耕平, 大久保智生

入試専門委員会は, 当日にオープンキャンパスを同時開催 (稲田隆之)

〈準備委員会〉

実施専門委員会委員, 藤井事務長補佐, 庵原専門職員, 白井総務係長, 高橋学務係長

〈実施委員会〉

有馬道久学部長, 実施専門委員会委員, 各コース・領域から選出された教員, 講座を担当する教員, 平尾事務長, 藤井事務長補佐をはじめ事務職員, 教務職員